

“化学オーケストラ” 誕生のいきさつ

富岡 秀雄

化学オーケストラ（化学オケ）がスタートして、今年で 10 年経ったと聞いて、驚いた。早いものである。10 年ひと昔とは、よくいったものである。誕生のいきさつをご存知ないメンバーも、増えていると伺う。無理もない。誕生に関わったメンバーでさえ、記憶が臙気になりつつあるのだから。幸い、当時交換したメールの記録が、完全ではないが、手許にある。良い機会であるので、記録として書き留めておきたい。

2002 年、私は定年を間近に控え、40 年近くに及ぶ大学生活を総括すべく、慌ただしい日々を送っていた。この年は、学内外でも様々な雑用にも忙殺され、自分のための時間を割くことが出来ない毎日であった。要するに、時間がどれだけあっても足りない上に、ストレスだけは溜まる状況にあった。

こういう時に、人はよく現実逃避的なことを考えるものである。例えば「今から大学から抜け出して、一週間くらい海外で遊んでみたい」とか・・・。私の場合、それが「化学者だけでオーケストラはできないだろうか」であった。

唐突に湧いたアイデアのようであるが、実は幾つかの伏線があった。

一つは、専門の枠を超えた化学者の交流と、一般社会からの化学者のイメージの向上を図りたいという思いが、ずっとあった。化学研究のもたらす恩恵に浴して生活しているにもかかわらず、世間一般の方々が化学者に抱くイメージは、概して好ましいものではないようである。そして、その遠因の一端は、私たちの側にもある。専門から離れた分野でのパフォーマンスも披露することによって、社会的なイメージの向上につながれば、一石二鳥ではないか。それは別にオーケストラでなくともよいのだが、日本はクラシック音楽愛好家が多いし、その上、東京一極中心で、交通の便の良い環境は、オーケストラという組織が作りやすいのではないかと考えていた。日本化学会は会員数三万人以上のマンモス学会である。楽器を弾ける人は、どう少なく見積もっても数百名はいるであろうし、関係者、家族も加えれば、何とかなる、という（甘い？）目論見もあった。

もう一つは、翌 2003 年 3 月に日本化学会 125 周年記念式典が開催されることが決まっていたことである。私はその年の日本化学会の理事であったのだが、理事会の大きな課題のひとつは、この式典に関することであった。この式典で化学者だけのオーケストラで演奏することができれば、それを契機にオーケストラを発足させることができるのではないかと考えたのだ。

とは考えてはみたものの、私一人ではどうしようもできないことは自明であった。最後の、そして最も重要な伏線は、畏敬する小林啓二先生（東大院総合）の存在であった。先生がフルートを吹かれることをお聞きしていたこともあるが、何よりもその人望に加え、指導力と包容力を兼ね備えたお人柄を存じ上げていたからである。

こういう案件を相談出来るのは、小林先生しかいない、とっていたので、直ぐ受話器を取った。記録によれば、それは6月5日であった。電話口で、すぐ賛同頂いた。翌6月6日頂いたメールには

「化学会オーケストラの件、夢があってとても魅力的なアイデアと思います。ぜひ実現させたいですね。」

と書かれていた。

そして、小林先生は驚くべき早さで行動されたのだ。その日のうちに、東大オケのOGである理学研究科化学専攻の大学院生にメールを送られ、協力を取りつけ、さらにオケ経験者の数名のご友人からも意見を貰われ、転送頂いた。

メールで意見交換を重ねるうちに、やはり「125周年記念式典で演奏する」という案を化学会が受け入れるかどうか、予め確かめて、それ次第で立ち上げ方を検討しよう、ということになった。そこで私は当時日本化学会会長であった、野依良治先生（名大院理）にこの計画に関してメールを送った。

「大変結構な話だと思います。式典となると、実力の方は信用していいですか？」

という返信を頂いた。ここで、式典での演奏に向けて、大至急で立ち上げていくという線が固まった。6月13日であったので、最初の発案からわずか一週間であった。

でも、式典までもう9ヶ月しかない。それからはメンバー集めのために、考えられることは全てしようということになった。この段階で、個人的に呼び掛けて賛同頂いた、伊藤翌先生（東北大院理）と西尾悟先生（東北大院理）にも相談に加わって頂いた。そして、①手分けして、可能な限り多くの研究仲間に呼びかける、②全国の大学・社会人オケのホームページに案内メールを送る、③会員誌“化学と工業”の「掲示板」に呼び掛けを掲載する、などを行なった。“化学と工業”2002年8月号の「掲示板」に掲載された文を、以下に示そう。

日本化学会の会員を中心にアマチュアオーケストラを設立しようという動きがあります。ふだん専門の領域で活躍している化学者が、少し気張らない分野で素顔を披露するのも会員活動の一つの姿ではないでしょうか。化学者のイメージを高めることに繋がることも期待できましょう。年会や式典など化学会の行事の折に演奏する機会が与えられれば、設立の意義はさらに深いと言えます。

何か楽器を演奏される方、オケで活躍しておられる方、昔されたことがある方、地域、年齢にこだわらず広く募集します。法人会員の企業にお勤めの方、個人会員の御家族の方でも結構です。こんな人を知っているという情報も歓迎します。ぜひ下記の呼び掛け人宛にお知らせください。

お寄せいただく情報は（1）演奏される楽器、（2）氏名、（3）年齢、（4）勤務先、（5）連絡先（住所、Tel, Fax, E-mail）、（6）その他（参考になること）です。

化学者のオーケストラ(仮称)設立呼び掛け人:富岡秀雄(三重大工:電話/FAX 059-231-9416
E-mail: tomioka@chem.mie-u.ac.jp)、小林啓二(東大院総合:電話 03-5454-6597 FAX
03-5454-4356 E-mail: ckobak@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp)、伊藤 翼(東北大院理:電話
022-217-6544 FAX 022-217-6548 E-mail: ito@agnus.chem.tohoku.ac.jp)

このような懸命な呼び掛けの結果、8月中旬までに、計66名の方からが応答があり、メンバー登録して頂いた。内訳は、以下の通りであった。

- 楽器別: Vn (20), Va (6), Vc (6), Cb (3), Fl (10), Ob (2), Cl (2), Fg (2), Hr (8), Tp (3), Tb (3), Perc (1)。
- 地域別: 北海道 (5), 東北 (8), 関東 (28), 東海 (11), 近畿 (14), 中国四国 (0), 九州 (0)。
- 男女別: 男性 (40)、女性 (26)。
- 年代別: 20代 (19)、30代 (20)、40代 (8)、50代 (9)、60代 (5)。不明 (5)。
- 所属別: 企業 (16)、大学 (26)、国公立研究所 (5)、大学院および学部学生 (15)、家族、関係者 (4)。

数百名という目論見は見事に外れたが、それでも人数的にも楽器編成の面でも、フル編成のオーケストラを立ち上げられると言う確信を抱かせた。ただ、大学オケでコンマスをやっていた、とか、フルートの名手である、とか予め情報のあった有力な方々の名前はなかった。無理もない。多忙な時期に、趣味の世界にまで時間を割く余裕はないのであろう。

様々な理由で、登録された方全てが、後の活動に参加されたわけではないが、このメンバーは、私たちに更に前進させる駆動力として十分であった。こうして、化学オケは、タマゴまではたどり着いたわけである。後はタマゴをどう孵化させ、育てていくか、であった。

この点に関して、決定的であったのは、日本化学会の保倉光邦氏の参加であった。氏は当時”化学と工業”の担当をしており、「掲示板」の呼び掛けを読んで、この活動を知り、参加されたのだ。保倉氏は、その後の125周年記念式典での演奏だけでなく、今日までの化学オケの10年間の活動を、影に日向に、大変粘り強く支えて呉れた最大のキーパーソンである。言い換えれば、タマゴの孵化から生育まで、一貫して面倒をみて頂いている方である。

何とか、タマゴは生まれたが、祝賀会までもう半年しかない。どうするか、様々な話し合いが持たれ、様々な試みがされた。

以下、時系列で進展状況を振り返っておこう。

● 8月23日(金)午後、学士会館分館(本郷)で“化学者のオーケストラ設立準備委員会”の最初の会合を持った。委員は小林先生、伊藤先生、西尾先生、保倉氏と私の5名であった。そして、式典演奏の曲目やオケの運営などの意見を聞くために、学会関連の演奏に詳しい中馬脩氏(龍角散管弦楽団指揮者)にも陪席して頂いた。これまでの進捗状況、これからの計画など、様々なことを話し合った。

● 9月16日午後、登録メンバーに呼び掛け、日本化学会館で最初の音あわせを行った。これが、化学オケとしての最初の音出しとなった。約20名(Vn7、Va3、Cb1、Fl3、Hr3、Tp1、Tuba1)の参加があった。弦はモーツアルトのアイネクライネとディベルティメントを練習し、管は編成が不規則であったのでフルートだけと金管に分かれて、幾つかの曲を練習した。終了後、会館で懇親会を行なった。

● 9月に大阪で開催された秋季年会で、呼び掛けのビラを配り、9月26日に説明会を持った。出席者は13名(中4名は新規登録者)。甲斐 泰先生(阪大院工)と齋藤一弥先生(阪大院理)に関西地区のお世話をお願いすることになった。

● 9月27日に開催された日本化学会125周年記念事業特別委員会で、本オーケストラによる演奏が議題になった。記念式典には天皇皇后両陛下がご臨席されるので、警備の関係上演奏は難しい、従って、演奏は祝賀会(3月19日夜)で依頼すると決まった。式典での演奏は叶わなかったが、いずれにしても、演奏することが正式に決まった。

● 10月2日に日本化学会会館で設立準備委員の会合を持った。さし当たっての指導者として中馬脩氏をお願いすることとした。中馬氏も交えた話し合いで、概略以下のように決まった。

(a) 125周年記念祝賀会は、はじめにモーツアルトのアイネクライネ又はディベルティメントを演奏する。

(b) 祝賀会半ばで少しポップス調の曲を演奏する。曲目としては皇帝円舞曲、金と銀、シンコペーテッド・クロック、トリッチトラッチ・ポルカ、ブルータンゴなど数曲候補が出されたが、ここでは決めずに一度練習会で演奏して決めることとした。

(c) 練習日は日本化学会館で11月24日、12月1日、15日の午後とし、その後の練習日程は仕上がり具合を見て決めることとした。

● 練習の出来具合から、祝賀会での演奏曲目は、アイネクライネ第1楽章、ディベルティメント第1楽章、皇帝円舞曲、金と銀、ワルツィング・キャット、ブルータンゴ、シンコペーテッド・クロックと決定した。練習会は、1月はメンバーが集まらないので、2月16日、3月2日、3月18日、3月19日(当日)とした。

● 3月18日の練習前に本オーケストラの発足会を開催し、正式名称を「化学オーケストラ」とし、会則を承認した。

こうして、3月19日の祝賀会を迎えた。会場はリーガロイヤルホテル東京の3階ロイヤ

ルホールであった。エキストラを数名依頼し、計 47 名で演奏を披露した。先ず開場と共に、アイネクライネを演奏した。入場してきた方々はオツと驚いたような表情をされたが、オケの傍にきて耳をすませている。開宴のあと、様々な方からお祝いの挨拶があり、オケはそのまま待機。乾杯の発生と共に、ディベルティメントを演奏。しばらくは歓談の時間があり、その間にメンバーも会食の仲間入りさせて頂いた。宴半ばで常陸宮殿下などのスピーチが始まり、スピーチ終了と共に、残りの曲を演奏した。

アンコール！という声が飛ぶほど、好評であった。祝賀会招待者であるアメリカ化学会会長で、ピアニストとしても有名な Columbia 大学の Breslow 教授が、オケの演奏中、傍まで来て、ずっと聴いておられたのが、印象的であった。

行動を開始して、9ヶ月足らず、練習も9月からわずか5回であったが、色々な幸運も重なり、化学オケは記念祝賀会でお披露目の演奏をして、スタートを切ることができた。

私たちの最終目的は祝賀会演奏ではなく、恒常的に活動続けることであったので、ここからが本当の意味でのスタートとであった。祝賀会での演奏という大きな目標がなくなると、当然ポテンシャルは低下し、メンバーも集まりにくくなるという現実があったものの、祝賀会演奏のおかげで、幾つかの収穫があった。一つは日本化学会会館の7階ホールを、練習会場として使用できるようになったことであった。オーケストラの練習会場探しは、休日の場合は特に困難を伴うが、交通の便の良い会館を利用できることは、活動を継続するために非常に大きい要因となった。もう一点は、祝賀会演奏を通して、コアメンバーが定着したことであった。

今後、どのような活動を展開していくか、様々な検討がされた。当初からずっと問題になっていたのは、日本化学会との関係であった。他にもオーケストラを持っている学会があるが、学会公認で学会名を冠した団体もある。しかし、我々は“化学者の趣味の集まり”という趣旨で活動をすることにした。

そして、①全体的な活動としては、日本化学会年会の期間中に、定期的にコンサートを開催することとし、これとは別に、②各地区、或いは各分野で、メンバーが小グループで、地区大会や討論会などで演奏をする、という二本立てで、活動を継続していくこととなった。

後者の活動は順調に推移し、活動の機会は広がっていったが、前者は難航した。一つの問題は学会発表との兼ね合いであった。当初は、学会発表が完全に終了するまでコンサートをしてはならない、という制限があり、夕方6時以降に演奏せざるを得ないという時期があった。しかし、段々と主催者、特に実行委員の先生方のご理解が深まり、発表中でもコンサート開催できるようになった。中でも特筆すべきは、2005年の神奈川大学での春季年会のコンサートであった。実行委員長の井上晴夫先生（都立大）が、午後12:30からと夕方16:40の二回コンサートを開けるように手配して頂き、おまけに、夕方の部は一般市民にも公開されるという配慮をして頂いた。これこそは、まさしく化学オケの設立趣旨に沿ったものであり、有難かった。

最近では、日本化学会の総会の後に続けて演奏することが恒例になり、スプリングコンサートという名称で定着つつある。こうなると、固定的なファンも増え、演奏を楽しみに来られる会員も増えつつあるようである。スプリングコンサートは2004年から始まり、今年で8回目を迎えた。世界各国にそれぞれの化学会があり、定期的な学会を開催しているが、所属会員によるオーケストラ演奏を行なっているのは、日本化学会だけであろう。オーケストラがユニークであるだけでなく、学会もユニークな存在となっている。

年会のコンサートとは別に、2006年からは秋には千代田区文化芸術の秋のオーケストラフェスティバルに定期的に出演するようになり、6回の演奏を行なった。従って、2006年からは、春と秋の年二回活動をするようになったことになる。

10年前に行動を始めた時に、ある程度の見聞はあったが、正直言って、ここまで続くという自信や展望は、メンバーの誰も持っていなかったのではなかっただろうか。色々な幸運が続いたことであろうが、偏に小林先生をはじめ、関東地区のメンバーの継続的な尽力の賜物でもある。就中、前にも触れたが、保倉氏の貢献は絶大であったと思う。もし氏が参加しておられなかったら、この文も存在していなかったであろう。氏に深謝すると共に、その幸運を喜ばずにはいられない。

March 20, 2012

[補足]

- 化学オケの活動は <http://homepage3.nifty.com/upward/orchestra/> を参照されたい。ホームページ作成に関して木原伸浩先生（神奈川大理）のご尽力に感謝したい。
- 設立当初から演奏面でもオケを牽引し、2004年のスプリングコンサートでは指揮もされた西尾 悟先生が、2006年夏に若くして逝去された。その年の春に開催された IUPAC Symposium on Photochemistry のバンケットでは、美しいフルートの音色を響かせておられただけに、俄に信じがたい、残念な出来事であった。